

「神の御国はあなたに」 -マタイによる福音書講解説教 88-

詩篇 第118篇 22節～25節
マタイによる福音書 第21章 33節～46節

説教 岡村 恒 牧師

「神の国はあなたがたから取り上げられて、御国にふさわしい実を結ぶような異邦人に与えられる」(43節)。主イエスはこの日、ぶどう園のたとえ話をされました。このぶどう園の主人は、自分が作ったぶどう園を愛し、農夫たちをも愛し抜いて下さる主人です。

主イエスは、十字架での死を直前に控えて、ご自分が何のために来られたのかを語られました。そしてさらに、これから主イエスご自身の身に起こることによって、ぶどう園の主人、主なる神がどういうお方かを明らかにされます。

祭司長や律法学者らと権威についての議論をした後、主イエスは二つのたとえをお話になりました。二つ目のたとえは、血なまぐさい話でした。このたとえを聞いていた者は誰でも、ここに登場する農夫たちに腹を立て、「そんなひどい事を放置しておいて良いだろうか」と憤りました。そしてすぐに、ここに登場する農夫たちとは自分自身のことだと思い知りました。

この日、主イエスがお語りになったたとえの中心は農夫たちではなくて、ぶどう園の主人でした。この主人がどういうお方か、主イエスの関心はこの一点に集中しています。

この主人はぶどう園をとて丁寧に造り、大事にしました。垣をめぐらし、酒ぶねの穴を掘り、見張りのやぐらを立てました。当時の農園としては大規模で特別念入りに造ったぶどう園を、農夫たちに託して旅に出しました。

旅というのは、ある一定期間、限定された時間、不在になるという話です。その間にぶどう園は刻一刻と変化していきます。ぶどうが成長し、やがて実がなる、そういう時間の話です。主人は、この成長のプロセスの全部を、農夫たちに任せました。ここには農夫たちに対する主人の深い信頼と愛情があふれています。

そしていよいよ収穫の「季節」が来ました。主人は大きな期待を抱きます。それはぶどうの収穫への期待と共に、信頼する農夫たちへの期待です。自分の信頼と愛情に答えてくれるはずの農夫たちに対する期待です。

しかしここで事件が起こります。ぶどう園に「僕たち」を送ったところ、農夫たちはこの僕をつかまえて、袋だたきにし、二人目を殺し、三人目も石で打ち殺してしまいました。主人が

さらに多くの僕たちを送った所、同じようにしてしまいました。主人はそれでもなお、僕を送り続けました。そしてとうとう一番最後に、自分の息子を送ります。強盗のような農夫たちが占領しているぶどう園に、自分自身の最も大切な息子を遣わす、これがぶどう園の主人です。

普通の主人であれば、最初の段階で、さっさと手を打ったに違いありません。しかしこの主人は、ぶどう園の収穫だけでなく、自分の信頼に対する農夫たちの応答を期待したのです。むしろ、農夫たちに答えてほしい、そういう熱い思いのために、繰り返し僕たちを遣わしたの違いありません。

農夫たちは、「その子を見て相談」をします。ぶどう園を横取りし、私物化することを計画し、実行します。農夫たちはよく知っていました。今、自分たちが手にしているものは全部、本当は自分たちのものではなくて、主人のものだということ。主人の期待に答えて、主人に喜んでいただく代わりに、全てを自分の手ににぎりしめようと相談します。

主イエスは、詩篇の言葉を引用します。家を建てる者、建築のプロが、最も役に立つ重要な石を捨ててしまう。そんな愚かなことが起こって、本当なら建物を立てることがもうできないような現場で、その捨てられた石が、建物全体を支え、完成させる石と成る。そう歌って、神のなさる不思議な出来事について語る詩篇です。

神のぶどう園とは、私たち自身のことです。神に信頼され、愛されながら、神の期待に応えるよりもむしろ、神のひとり息子を殺してさえ、神のぶどう園を横取りしようとする。自分自身の人生、命を全部自分のものにしてしまおうする愚かな私たち自身が、実は神のものだ、神のものとして創られ、愛され、愛し抜かれた者だ。主イエスはそう言われるのです。

神のものを神に返して良い。神に愛され、期待された者として生きて良い。息子を送ってさえ何とかご自分のもとに取り戻そうとしてくださった主人が、私たちの造り主です。ぶどう園の主人です。だから、私たちはこのお方に信頼して良いのです。このお方の信頼に応えることができないままで、それでもなお、神のものとして生きて良いのです。

(記 岡村 恒)